法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

中村哲法政大学総長と沖縄文化研究所

飯田，泰三

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
50
(開始ページ / Start Page)
5
(終了ページ / End Page)
17
(発行年 / Year)
2023-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030077

中村哲法政大学総長と沖縄文化研究所

飯田泰三

法政大学沖縄文化研究所は、沖縄が本土に「復帰」した一九七二年の六月二九日に、設立されたが、なぜこの時期に法政大学に「沖縄文化研究所」として設立されたのかは、中村哲という存在を抜きにしては考えられない。

『法政大学百年史』（一九八〇年）の「沖縄文化研究所」の項（執筆、外間守善）の冒頭は、次のように始まる。

「法政大学沖縄文化研究所は、沖縄を中心とする南島の文化と言語の総合的研究のために中央と現地を結び、また関連の人文、社会諸科学の研究センターとなることを目指して設立（昭和四七年六月二九日）されたものである。

ただ、設立のための直接的動機は、英文学者であり評論家でもある中野好夫氏が、私財を投じて設置された「沖縄資料センター」を、沖縄の祖国復帰（昭和四七年五月）に際して法政大学に寄贈なされたことにあったことを特記しておきたい。」

ここでは、なぜ中野好夫氏が「沖縄資料センター」を法政大学に寄贈したのかを、外間さんは述べていないが、それは中村哲さんが中野好夫氏と「憲法問題研究会」で持っていた接点によるのである。そのあたりの事情につき、私は中村哲『宇宙神話と君主権力の起源』（法政大学出版局、二〇〇一年）に付けた「解題」（飯田『戦後精神の光芒』（二〇〇六年）にも、「中村哲の生涯と学問」と改題して所収）で述べたことがある。

「一九七二年六月、法政大学沖縄文化研究所が設置され、中村総長はその初代所長を兼任することになった（七七年まで）。中野好夫が、七二年五月に沖縄の施政権が返還され沖縄県が発足したのを機に、それまで彼が関わってきた沖縄復帰運動の過程で東京に作った沖縄資料センターの資料を、東京の公的な機関ないし大学に引き取ってもらうことを希望し、中村が憲法問題研究会（――この一九五八年発足の研究会は、岩波書店の吉野源三郎がプランメーカーで、まず大内兵衛と相談しながら、我妻栄、宮沢俊義の法律学界の両巨頭を引き出し、ついで丸山眞男、辻清

明、佐藤功、中村哲などが相談してメンバーを拡大したもので、特に丸山の意見で、法律学や社会科学畑の諸学界の権威だけでなく、文科系の学者、たとえば中野好夫、谷川徹三、竹内好、久野収、桑原武夫、松田道雄等を入れることで、異色あるものになったという（中村「丸山君と戦中・戦後の日々」、『丸山眞男集第十四巻』別冊「月報」、所収）――）の場で中野からこの話を聞いて、それを受け入れることにしたのが、沖縄文化研究所設置の直接のきっかけであった。しかし中村は当初から、当時法政大学文学部教授だった外間守善を中心に、むしろ非政治的な、言語・文学・民俗を中心にした文化研究所とする方針を立てた。」

『法政大学沖縄文化研究所所報』第一号（一九七三年六月三〇日）で中村所長は、次のように研究所設立の抱負を述べている。

「沖縄は日本の文化を考えるときに、その原点となるもの、国際的に接点となるものを含んだ宝庫であって、沖縄研究は即日本研究そのものであり、広く南方文化研究に及ぶものである。研究所としては、沖縄の調査研究に際して、言語学、民俗学、人類学等の最高の知識を集中し、それに現代的脚光を当てることになってくる。それには、一方で沖縄における未知なるものの発掘、他方で比較研究の高い視野が必要であって、この点で本学の研究所が、従来の南島研究に何者か

を付け加えるユニークな一頁を開くことが出来れば幸いである。」

『宇宙神話と君主権力の起源』の「解題」（飯田執筆）は、右の個所につづけて次のように述べる。

「そこには、かねてよりの中村自身の沖縄に対する独自の関心のあり方が作用していた。さかのぼれば、成城学園時代に仲原善忠（久米島出身の沖縄研究家）に教えを受けたこと、また柳田国男（――昭和二年、成城の雑木林の中の中村家の一軒置いた隣に書斎を作り、息子の為正（のち生物学者）とともに移ってきて、成城学園中学で中村の担任だった仲原善忠の紹介により、中村は為正の二、三歳年長の友人として柳田の書斎を遊び場のようにして、出入りするようになる――）の『海南小記』（一九二五年）の世界に魅せられたことがあったが、さらに「民俗台湾」（中村が台北帝大時代、その創刊に関わった雑誌名）を舞台にした、中村の原体験ともいえる世界があって、その台湾が戦場になろうとしたときマッカーサーの「沖縄決戦」への戦略変更があった結果、妻の死や自身も生死の境をさまよう経験をしながら関わった台湾の、いわば身代わりとして犠牲になった沖縄という思いが重なっての、沖縄への思い入れであった（前掲「丸山君と戦中・戦後の日々」参照）。それと、民主主義の前に立ちはだかる君主制、とりわけアジア的ないし非西欧的なそれの、さらに特殊な形態である天皇制に対する理論的な関心が結びついて、

「琉球王国形成の思想――政治思想史の一コマとして」（『沖縄文化研究』第一号、七四年六月）になるのである。中村が法政大学を辞任する半年余り前にも、沖縄文化研究所の共同研究の成果として出された『沖縄久米島』（弘文堂、八二年十月）に「久米島の政治起源」を寄稿している（なお、参議院議員時代の中村は、北方・沖縄問題小委員会の委員長を務めた）。」

こうして、法政大学沖縄文化研究所の発足は、中村哲という人の生き方と学問を抜きにしては語れないことが分かるだろう。中村哲先生が二〇〇三年八月一〇日に亡くなられたのち、『沖縄文化研究』第三一号は「中村哲先生追悼記念号」として発行された。これは当時の研究所長、安江孝司氏の意向により、「中村哲歌集」「中村哲先生執筆論考」「中村哲先生著作目録」「中村哲先生の略歴」「追悼文」（諸家）「追悼論文」（諸家）等より成り、七〇〇頁余の大冊である。中村哲と沖縄との関わりの全体を知るには、この大冊を読み込むのが一番の捷径なのだが、今それをする余裕がないので、先にも引いた「丸山君と戦中・戦後の日々」（『丸山眞男集第十四巻』月報（一九九六年一〇月）所収）を全文再録することで、それに代えたい。これは私が梅ヶ丘の中村先生宅で聴き取りしてきた談話をテープ起ししたものだが、丸山さんとの関わりを語る形で自らの生涯を回顧したもので、哲さんの実質的な絶筆とも言えるものではないかと思う。そして、哲さんが「沖縄文化研究」と言ったときに「文化」という語に籠めていた意味の広がりを覗い知ることができよう。

丸山君と戦中・戦後の日々

丸山君がいなくなったということは私にとっても大きなことで、人の生死ということを考えさせられるとともに、自分が色々なことをしなければならなかったのに、ずるずると延ばしていて、それをしないで来たことが慚愧の念に堪えないという思いです。

丸山君の名前を最初に知ったのは、僕が南原繁先生の下で助手を終わって、台北帝大に行くことになって、しかし年齢が学生より若いと困るからと、赴任を一年延ばされていたころです。そのころ丸山眞男という優秀な学生がいるという風評を聞いていた。その彼が書いた緑会雑誌掲載の懸賞論文を読んだんです。当時は政治学の教官としては南原教授と岡義武・矢部貞治の両助教授がいるだけだった。吉野作造先生は、学生時代に着物を着て研究室にブラっと来られたのを見かけたりしたけれども、胸を病んでいて間もなく亡くなったし、行政学特講の蝋山政道さんの政治学代講は助手時代に出てみたが、まもなく大学を去って議会の方に出られた。しかも岡さんに続いて矢部さんも洋行して留守。そこへ瀧川事件、天皇機関説事件と続いて、大学の校庭から門前が騒然としていた時期です。美濃部達吉先生の憲法講義は僕の次の学年まで聴くことができたのですが、僕の助手時代、「天皇機関説」攻撃が最高潮だったころ、美濃部先生が研究室の公法・政治研究会で心境を述べられたことがある。そのとき先生は鎌倉に所用があり、そこから急いで来られたのだが、鎌倉で小便がしたくなって

道端でしたら、そのすぐ前が派出所だったので、渦中の人物がそんなところで見つかったら新聞記事ものだと、ハラハラして上京した、と真顔で話された。そういうフランクな大先生だった。

丸山君はその頃の緑会の懸賞論文で南原先生に抜擢されたようですが、私自身も別の懸賞論文に応募したことがあり、同じコースを丸山君もたどっているんだなと思ったのでした（結果が新聞に公表されたのです）。しかしその頃は丸山君と個人的に会ったことはないんですよ。私は南原先生が初めて開いたゼミの学生で、ヘーゲルの『歴史哲学序論』を読んだのですが、新カント派の先生はその時は特にヘーゲルを高く評価してというようなことでなく、ただドイツの学説の一つを読むという程度で、みんなで解読していったんです。その時の仲間はみな役人になり、それも内務省で、新しい国警二期生になったわけです（筆頭は藤田次郎皇宮警察長官）。助手になってからも、南原先生とは用件のある時だけ話すという関係で、同じ頃の助手では、刑法の団藤重光、フランス法の野田良之などと親しく、助教授では岡義武先生と学問的つきあいがあったんです。

丸山君と話をするようになったのは、私が台北に赴任後、休みなどで東京に帰った時、本郷の研究室に行って丸山君のいた共同研究室に顔を出すようになってからです。辻清明君、佐藤功君が同室だったけれども、話をするのは丸山君だけね。そのころ法学部の助手を終えた先輩の中で、相撲でいえば若者頭（わかものがしら）格だったのが戒能通孝さんだったが、その博識なおしゃべりを、それまでの助手連中はあまり本気で相手にしなかったのを、よく聞いて、研究室らしい雰囲気を作ったのが、丸山君でした。

高柳賢三先生（のちの憲法調査会長。英米法）などもよく顔を出されました。

私は台湾が戦場になろうとする直前の時期に、女房がちょうどお産で、戦場になれば新高山（にいたかやま）の山の中の原住民部落に避難してお産しなければならず、私個人は一度戦場で負傷して帰ってきていたが、学徒出陣で教え子のクラスが一挙になくなるし、私自身また召集されて民兵みたいになる可能性があったから、同僚に相談したら、民間人でいるうちに女房を内地に帰した方がいいということになって、船で帰国の途についたが、デング熱になり、まもなく女房を亡くしてしまったわけです。それで台北帝大を辞めて、一人東京に引き揚げてきてからも、研究室に行って会うのは丸山君でした。その頃は丸山君はもう助教授でしたが、自分の考えを持った人でした。文科では林健太郎が知られ、丸山君も秀才として知られていたが、業績はまだあまり知られてなかった。戦争が終わってからも一緒に戦後の文化のことなどを、研究室でよくしゃべって、その中から自然に出来ていったものの一つが「青年文化会議」でした。

「青年文化会議」の中心はのちに同人季刊誌「未来」グループに代わっていったわけですがね、当初は三四郎池の上の「山上御殿（さんじょうごてん）」のあたりを占拠した格好で、大学の秩序がなくなっていた時、いわばシュトルム・ウント・ドランクの時代に、青年たちが行動した、そういう文化運動だったと言っていいのです。ドイツでいえば第一次大戦後のワイマール文化のような雰囲気があったといえます。私は学生時代に大学新聞にちょっといたものだから、助手時代にかけて、東大新聞の編集室が大学本部

の一部に割り当てられ、時計台の建物の中にあったので時折顔を出し、焼け跡を抜けて鉄門から帰りました。医学部の死体保存室の窓際を通ると人体がアルコールの中に浮かんでいました。その東大新聞編集室で瓜生忠夫（戦争中の東大新聞編集長、そのあとが桜井恒次）や野間宏（京都の三高時代、富士正晴と瓜生とで『三人』という雑誌を作り、当時は瓜生の家の二階にいて、東大新聞のアルバイトに来ていた）などを知ったのです。そこが共同研究室以外の私の溜まり場で、そのあと浅草（川端康成が「浅草紅団」で書いている世界だね）に出たり、正門前の郁文堂（古本屋）の横の、高見順や武田麟太郎なども姿を見せていた喫茶店で、話し込んだりしたものでした。その瓜生や桜井、そして野間らと「青年文化会議」を作ろうとしたとき、文学班を作る相談に、丸山君のところに行った。われわれ戦前以来の作家くずれの青年たちの仲間、ないし教養部学生の文芸部あたりの意見で、木村健康とか林健太郎の名前が出たんだが、丸山君はダメだと言って、彼の一高時代の同級生の杉浦明平と寺田透を入れることにして、彼らをオルグしたんです。（また、朝日の主筆だった佐々弘雄氏が相談役で発行した『潮流』の二号からは、佐々氏に私が代わり、丸山君などに執筆を頼みました。）

結局、「青年文化会議」は大学新聞くずれと法学部研究室を拠点として作ったと言っていいと思うが、川島武宜さんや木下順二君などにも入ってもらって、綜合的な文化運動を目指した。川島さんが『文化会議』創刊号で「オールド・リベラリストと訣別し」という勇ましい宣言をしているけれども、川島さんにとっては、その先生である我妻栄さんへの訣別だったんだ。我妻さんは当時の東大法学部

のいわば最大の実力者で、宮沢俊義さん、横田喜三郎さんと並んで「（爆弾）三勇士」と言われていた。その我妻さんの実証法学に対しても川島さんは、それが「社会科学的」ではないと批判したわけです。川島さんと大塚久雄さん、飯塚浩二さん、この三人は疎開先の与瀬（神奈川県津久井郡）で一緒だった、いわゆる与瀬グループで、彼らが「青年文化会議」の社会科学班の強力メンバーとなった。大塚さんを引き出したのは東大新聞部の学生たちだったと言ってもいいので、彼らが「大塚史学」の時代が来たなどと言ったのです。

社会科学部門のもう一人の顔となった内田義彦君（経済学史・社会思想史）は、下村正夫（映画監督・演出）と甲南高校で同窓で、京都法学部のホープだったマルクス主義法学者、加古祐次郎が甲南高校教授だった縁で、京大の戦中左翼の芽として三高の瓜生、野間と横のつながりがあった。下村は、朝日新聞の副社長をした下村海南の子で、親子の出資で新雑誌を計画していたらしい。その新雑誌に野間の「暗い絵」を出そうとしていたのを、私などが渋谷の瓜生の家の二階（の野間の部屋）に出かけて行って、それを横取りして世に出した（雑誌『黄蜂』に掲載）というように見られた。木下順二は別のつながりで入って来たので、戦争中は清水市の旧家芝野進一郎の世話で鉄舟寺に居候になっていて、山本安英のいた劇団のアシスタントをしていたという。瓜生は戦争中、ニュース映画の日映にいて「ビルマ戦記」のプロデューサーをやり、さらに黒沢明を最初に評価したりしただけあって、「青年文化会議」をマネージするエネルギーもあったね。

そういえば、清水幾太郎が立教大学のアメリカ研究所に場所を借りてやっていた「二十世紀研究所」にも、丸山君は呼ばれていたらしく、彼の方はそれにあまり積極的でなかったようで、丸山君のやることになっていた経済学部の「政治学」を代わりに僕がやったことがある。また久野収君が京都から我々を頼ってやって来たが、彼は新村猛さんたちのやっていた『世界文化』のグループとして戦争中やっていて、中井正一さんとの関係が深く、別の系統なんだね。

その後でいえば、丸山君との接触が頻繁だったのは、「憲法問題研究会」の時です。これは岩波の吉野源三郎がプランメーカーで、まず大内兵衛さんと相談しながら、政府（岸信介内閣）の「憲法調査会」に対抗して我妻栄、宮沢俊義の両先生を立て、それから丸山君、辻君、佐藤君、僕などが相談して拡大したんだが、その拡大にあたっては丸山君の意見が強く働いていたね。一つは社会科学畑だけでなく文科の人も入れること。中野好夫、谷川徹三、竹内好、久野収君なんかがそれで入って、この研究会を異色なものにした。他方は大家を入れることで、矢内原忠雄さんや南原先生も名を連ねたが、こちらはあんまり出てこなかった。僕は欠かさず出て討論を続け、法政大学の紛争最中でも、無理して出ました。書記は初めのうち、岩波の安江良介君でした。

丸山君ってのは見事だよね。脳髄の線が幾何学的にできてる構造物とでもいうか。丸山君の理論構成や思考様式は、リゴリズムや形式論理を貫くところがあったけれど、人に対しては親切であったかいんだが、原理を貫くときには冷徹なところがある。初期にはボルケナウとかマイネッケから学んだ

のかもしれない。しかし他方で人を可愛がり育てるというところなど、何ともいえない良さ、あたたかさがある。去年、法政でやった日本政治学会の懇親会でもしゃべったんだけれども、松下圭一君は丸山君に頼まれ、特に大内兵衛先生の了解を得て、法政の助手に取ったんだ。その翌年、藤田省三君も、これは形式的に採用試験を通ってからだけれども、法政に助手として来てもらった。

僕の『知識階級の政治的立場』について、丸山君はちょっとからかったような書評を東大新聞（一九四八年二月一九日）に書いてくれたが、それは当然なので、あれは戦争中に同人雑誌『新思潮』や『童説』に書いたものが中心で、専門家として書いたものじゃないんだよね。そのころ僕は文学青年くずれで、戦後すぐには自分の場というものを作ることができないでいて、作家になり切れず、かといって学者にもなり切れぬまま、それを先祖の浦上玉堂の流れと言ってみたりして、寺田が気にするような、自分でもいやらしいんだ（笑）。私は左翼にシンパシーを持っていたけれども、「無党派左翼」だったしね。

僕は沖縄文化研究所を法政大学に作ったが、それは台湾から女房を引き揚げさせた直後、当時の台湾軍司令官だった安藤中将、最右翼の悪名高い長大佐らが、沖縄へ移動するんだ。マッカーサーの「沖縄決戦」という戦略に変わって…。つまり、台湾が戦場にならなかった犠牲としての沖縄という構図なんだ、女房を亡くしたり、自分も生死の境を超えながら関わった台湾、そして沖縄、という思いが僕にはあるんだ。慙愧に堪えないという思い……。丸山君の東洋政治思想史、学説史は見事なん

だが、強いて言えば、その思想、学問がどういう風にひろくアジアを打開して行くか、ということが残された課題としてあると思うね。沖縄や台湾、あるいは南中国、さらには国内では四国の谷間や九州の峰々にもある南方的なもの、それらが学問の体系でなくカオスのように、高天の原の雲が湧き出るように広がっている世界を、どう全体として学問にできるかということだ。僕は子供のころ成城学園で柳田国男の書斎に出入りしたことがあって、ずっと気になっているんだが、丸山君の学問と柳田民俗学的なものとの接点ということも、依然として今後の我々の課題にあるんでしょうね。